

Cross Road



——子どもたちに大人気のアンパンマンは、どのようにして生まれたのでしょうか。
一九四五年、僕は上海で終戦を迎えました。このときを境に、それまで信じていた「正義」というものがすべてひっくり返ってしまいました。正義とは簡単に変わっ

てしまうもの、信じがたいものだと気づいたんです。ところが戦後、この仕事を始めてみると、漫画の世界には「正義の味方」であるヒーローがたくさんいて、それぞれが自分の正義のために戦っているわけです。彼ら自身は決して傷つくことはないし、相手をやっつけたときに街や建物が壊れたり燃えてしまったりしても、あとはお構いなし。これはおかしいんじゃないか、と僕は思いました。本当の正義の味方ならば、壊れた建物や街を元どおりに直さなきゃいけないのではないかと。巻き込まれた人たちを助けに行くべきではないかと。

そんな思いの中から生まれたのが「アンパンマン」です。漫画というよりも、メルヘンのつもりで書きました。子ども雑誌に掲載し始めた一九七三年当時、世界にはたくさんのお腹が空いた子どもたちがいた。ひもじい思いをしている彼らを助けるには、お金ではなくまず食料を与えなければと僕は考えたのです。そのときになぜ「あんぱん」だったのか。あんぱんは、パンの中に甘い小豆あんが入っているから。おやつにもなるし食事にもなる。このあんぱんこそ日本人の象徴として一番びんとくるのではないかと考えたのです。和魂洋才——洋服を着ている僕たち日本人は、みんなアンパンマンなのです。

アンパンマンは武器をいっさい持たず、おなかのすいている人にパンを与えに行くスーパーマンです。顔をちぎって食べさせるから、自分はパワーダウンしてしまう。時には戦わなければならない場面もあるのですが、素手の「アンパンチ」では相手は決して死にません。その頃、アニメでは怪物のやかっこいいヒーローが全盛の時代でしたから、担当編集者はもちろんのこと僕自身も、こ

やなせ・たかし/1945年高知県生まれ。東京高等工芸学校図案科(現千葉大学工学部)卒。高知新聞、三越宮伝部デザイナーを経て漫画、73年刊行の絵本「アンパンマン」は88年テレビ化、89年映画化され大ヒット。「てのひらを太陽に」などの作詞家としても知られ、72年刊、現在も編集長を務める宝章、95年日本漫画家協会文部大臣賞等受賞多数。代表作に『やさしいライオン』『ボオ氏』『リンの鈴』など。出版した絵本の点数は400点にも及ぶ。

正義は自分が傷つくことなしには行えない。
だからアンパンマンは自分の顔をちぎって
おなかをすかせて困っている人に食べさせる。
それで自分がパワーダウンしてしまうとしても。

詩でも絵本でも漫画でも、この人が描く世界にはたくさんのお愛が詰まっている。人はなんのために生まれたのか——作品は私たちにその答えを教えてくれる。「僕たちは、人を喜ばせるために生まれたんだよ」。温かいまなざしは、命あるすべてのものにそそがれている。

やなせたかしさん

(絵本作家・漫画家)

んなに地味で不格好なヒーローは子どもたちに受け入れられないだろうと思っていました(笑)。でも、それでもいいじゃないかという反骨精神で描き続けていたのです。

——それが、五年ほどして幼稚園・保育園の子どもたちを中心に徐々に人気が出始めました。

そうなんです。正義は自分が傷つくことなしには行えない、愛は献身の上に成り立つという僕の考え方を一番はじめに理解してくれたのが三、四歳の小さな子どもたちだったというには驚かされましたね。幼児はアンパンマンの作者が僕で、ほかにどんな本を書いているかということは全く知らない。ただ、おもしろい、好きという直感だけで選びます。ところがある程度大きくなると知恵が付いてしまって、有名な作家だからとか他の人が見ているからというだけで評価するようになってしまふ。小学生くらいになると子どもたちはこう言うんです。「アンパンマンなんて、あんな赤ちゃんの見るとはもう見ない」とね(笑)。

アンパンマンシリーズはもう一〇〇冊を超えますが、相変わらず初めの頃の本が良く売れているんです。今見ると絵がとてめ稚拙で、僕としては早く絶版にしてほしいぐらいの恥ずかしい出来なのですが、これを読んで育った子どもたちが、今度は親になって本を買って読んであげる立場になつていられるんですね。今年の正月に心臓の手術を受けたときも、執刀医の一人から幼稚園の時にアンパンマンを読んでいたと言われて、月日の流れの早さを改めて実感しました。僕は何をやるのも遅くて、人よりもずいぶん時間がかかります。だからこうやって

今、ようやく仕事ができるようになったと思つたら、八〇歳になっていました(笑)。

——絵本からスタートしたアンパンマンも、テレビ、映画と広がって、スペインやブラジル、東南アジアなどでもテレビ放映され、世界中の子どもたちに愛されています。

たとえば、ベルギー生まれのキャラクターにタンタンがありますが、これが英語圏でものすごい人気を集めています。「タンタンの国」としてベルギーの名を世界に広めています。首都、ブリュッセルのど真ん中にはタンタンをはじめとした作品を展示する国立の漫画美術館があるし、地下鉄の壁面にもタンタンが描かれている。また、世界各地にデイズニールランドができるほどアメリカのミッキーマウスは有名でみんなに親しまれています。このように、キャラクターは一国の財産にもなりうる力を持っているのです。

日本は世界最大の漫画大国で、これほど多くの作品やキャラクターが次々と生み出されている国はほかにありません。子どもたちのほとんどの人は、漫画を読んで大人になつていると言つてもいいでしょう。だからわが国の文化を語るとき、もはや漫画抜きには語れないと思うのです。それなのに日本では漫画や漫画家、それから絵本などの児童文化に対する評価が相変わらず低い。これはとても残念なことです。

でも、これだけの漫画大国ともなると当然のことながら、漫画が良いとは言いきれないくでもない作品がたくさんあるのも事実です。これは僕たち漫画家も出版社



〈顔をあげるアンパンマン〉

昨年アンパンマンミュージアムに隣接して、アンパンマン以外の作品を展示する「詩とメルヘンの館」もオープンしました。この二つの美術館には予想を大きく上回るたくさんの方が来てくれて、家族そろって絵を見た後で屋外の芝生でお弁当を食べて一日遊ぶといった光景が見られます。また、ミュージアムとは少し離れた町なかに、アンパンマンライブラリ(町立図書館)もつくつたのですが、ここにはアンパンマンだけでなく、僕がコレクションした美術の専門書などが多数置いてあります。

僕は、ゴテゴテ飾り立てて生活するのも好きではないけれど、貧乏というの嫌いなんです。たとえば目の前に困っている人がいても、お金がなければどんなに気持ち

僕は、描いた作品がウケなくてもかまわない。
「なぜ描くか」さえ自分ではっきりとしていれば。
でも、それが読者にとってつまらないとすれば
やっぱりその作品は、良くないと思う。
良心的な作品は、おもしろくなくてははいけないから。

も真剣に考えていかないといけないし、悪いものは悪いものとして自然淘汰されるような社会になつていかないといけないですね。

でも、人気のあるものや売れているものを見てみれば、必ずしも悪いものや刺激の強いものばかりが支持されているわけではないということがわかります。たとえば宮崎駿の映画に多くの人が感動して、サザエさんが相変わらず高視聴率を保っている——大衆が心から望んでいるのは、やはり穏健中正のものなのです。ところが、普通の感覚ではウケない、インパクトのあるものがウケるのではないかという大きな誤解が、マスコミをはじめとした発信者側にある。もちろんそういつたものを求める人もいるでしょうが、本当に多くの人がそれを求めているかという点、疑問ですね。

——高知県香北町に、町立のアンパンマンミュージアムがあると聞きましたが、これはどういった経緯でつくられたのでしょうか。

香北町は僕のふるさとで、この地にアンパンマンミュージアムができたのは一九九六年のことです。

僕は命あるうちに、自分が一番嬉しくて楽しいことをしたいんです。毎日、「今日もおもしろかったね」と言つて過ごしたい。その僕にとつて一番嬉しいことは、人が喜んでくれること。だから、子どもでもお年寄りでも誰もが気軽に遊びに来られる美術館をつくりたいという思いがずっとありました。でも、個人美術館などおこがましいのではないかと考えていたところ、町からお話をいただけて受けることにしたのです。

ちがあつても助けることはできない。ですから僕は、借金をしないで自分ができる範囲であれば、お金はほとんど使おうべきという主義なんです。ただ、そのときに大切なのが使い道で、自分が大好きなことや人の喜ぶことに使うということがポイントではないでしょうか。僕はバーを飲み歩くのは好きではないし、ゴルフもやりませんが、僕の作品を並べる美術館をつくって、それで町が活性化され、絵を見に来た多くの人にも楽しんでもらえるのなら、これほど嬉しいことはありません。

文化・芸術という点、とかく難しく考えられがちですが、僕は「入り口はあくまで低く、奥は高く・深く」あるべきだと思つてます。僕の絵は名画でも芸術でもない、ほんの入り口。たとえば雨が降ったときに雨宿りをしている。美術館はそんな場所ではない。畏れながらかまこまこ行って行く必要はありません。たまたま入つてみたら気に入った絵があつて、「また来てみよう」「今度は違う絵も見よう」というのでいいのではないのでしょうか。

文化を考へるとき、世界的に通用するような最高部分を引き上げることばかりに目がいきがちですが、生活に身近な大衆文化のレベルを上げることが、文化全体のレベルを引き上げることにつながるのではないかと思つています。たとえばテレビのアニメソングやCM音楽、演歌などの質が上がり、みんながそれを喜んで支持するようになったとき、はじめて文化的水準が上がつたといえるのではないのでしょうか。それを担う一端に僕たち漫画家や絵本作家もいると思うと、今後ともっと身を引き締めて努力していかなければいけませんね。

(取材・構成/編集係)

Cross Road